



世田谷区立桜丘中学校 前校長
西郷孝彦

さいごう・たかひこ ●1954年生まれ。上智大学理工学部卒業。東京都立の養護学校(特別支援学校)をはじめ、大田区や品川区、世田谷区で数学と理科の教員、教頭を歴任。2010年、世田谷区立桜丘中学校長に就任。「すべての子が3年間楽しく過ごせる学校」を目指した結果、校則や定期テスト、宿題、制服、チャイムの廃止等で注目される。生徒の発達特性に応じたインクルーシブ教育を取り入れ、個性を伸ばす教育を推進。『校則をなくした中学校 たったひとつの校長のルール』(小学館)、『「過干渉」をやめたら子どもは伸びる』(小学館新書、共著)が話題。

Special Interview
～中学校の現場から～

「それは本当に子どものため？」 から始まる学校改革

普通の公立中学校でありながら、校則や定期テストの廃止など大胆な改革を進めてきた世田谷区立桜丘中学校。

この春まで10年間校長を務めた西郷孝彦前校長に、
何のために学校はあるのか、そのために教師はどうあるべきか、お話をいただきました。

——この10年、桜丘中学校で行われてきた校則撤廃、定期テストや宿題の廃止、服装の自由化などの大胆な改革について、背景を教えてください。

最初にお伝えしておきますが、子どもたちが困っていないければ改革など必要ないんです。「靴下の色は白に限る」という校則も、生徒に不満がなければ、そのままでも良かった。でも、多くの子どもたちは理不尽な校則に不満をもっていました。私の性分としても、理屈に合わないことは嫌いです。

そこで生活指導主任に、白でなければいけない理由を聞いたところ、「汚れが目立ち、清潔を保てるから」という答えが返ってきました。確かに「理ある」。ところが、桜丘中には「セーターの色は紺」という校則もありました。再び理由を尋ねると「派手にならないように」という返事。それはおかしいですよ。黒や白も派手ではないし、靴下の件とも矛盾する。その校則では、生徒から「なぜ紺は良くて、黒はいけないのか」と問われても、「規則だから」としか答えられません。それで、生徒は本当に納得するでしょうか。

個人的な意見ですが、校則には虐待に似た構図があると思っています。虐待を受けた子は、自己防衛のため何事もなかったように振る舞う。非合理的な校則も、最初は反発するけれど、



次第に疲れ、目をつむるようになる。

「規則に慣れておかないと社会で困る」という意見もありますが、むしろ困るのは、自分で考え、判断することをやめ、無批判に人の指示に従うようになることでは？ 今、目指している教育のあり方と逆行しています。

私は先生方に、「なぜ？」「理由は？」と問い続けました。そうして5年かけて理不尽な校則は全廃されました。

——寝ていても怒らないなど、授業のあり方についても、一石を投じました。

発達段階から考えても、子ども自ら意見を言えることは大切なことです。ですから授業がつまらないなら「つまらない」と言っていし、寝てもいい。

教室に入ることすらためらう不登校

気味の生徒は、職員室前の廊下を居

場所とすることも認めました。すると

「なんであいつだけ」という不満をもつ生徒も現れます。そのため、特定の

生徒に配慮する際は「君たちもいいんだよ」と全員に認めるようにしました。

そうやって誰一人特別扱いすることなく、「自分は自分でいいのだ」という体験をさせる。それがあからこそ「みんな違っていいんだ」という思いやりの心も生まれてくるんです。

批判に動じることがないのは、生徒が味方になってくれるから

——取組が外部に紹介されるにつれ、反響も大きくなっていったのでは？

多いのは「嘘だろう」というもの。校則をなくしたら学校が落ち着いたということが信じられないのでしょうか。でも、見学に来ると納得されますよ。

確かに、自由と好き勝手を混同しがちな1年生の教室は無秩序にも映ります。けれど、課題意識をもつ教育関係者は視点が異なります。その後ろにいる、叱ることなく、時間をかけて生徒と向き合う先生の様子を見て、

「いいですね」と言ってくれるのです。

一方で従来の教育を良しとする人は、「校則がないなんてけしからん」などと頭ごなしに批判してきます。

校則はなくなりましたが、学校も社会である以上、法律は適用されます。いじめは傷害だし、万引きは窃盗。警察とも連携します。生徒が器物を壊したら、故意でなくとも弁済を求めます。毅然とした態度をとることで、保護者も納得し、安心もされるんです。

いずれにしろ、どんな批判にも動じないのは、子どもたちが味方になってくれるから。生徒の評判が良ければ保護者をはじめ、応援団も増えていきます。

仮に、評判が悪ければ、何かが間違っているんでしょう。あくまで子ども中心主義。決して私の恣意的な教育を押しつけてきたものではありません。

——生徒の評判は、表面的な優しさや楽しさにも左右されませんか？

子どもたちは大人をよく見ていますよ。威圧的なタイプはもちろん、生徒に媚びるような先生も見透かされます。反対に、信用されるのは、生徒に向き

合う先生です。そういう教師は、生徒のわずかな変化も見逃しません。

全員を見取ることが難しくても、まずは興味をもった子でいいので、とこ

と向き合う。すると見る目が育ち、他の子にも同じように広げられます。結局、みんな同じなんです。真面目な子だって、よく見ると荒れているし、不満を抱えていることがわかる。逆に言うと、一人の生徒を見られない人が、全体を見られるわけがありません。

養護学校と荒れた学校が原点 大空小の中学校版になる決意

——何が西郷先生を突き動かしていたのでしょうか。原点を教えてください。

人付き合いが苦手だった私が教職に就いたのは、オイルショックの影響で工学系の採用が縮小されたから。「いい大学を出て、いい会社に入れば安泰」という時代であり、しばらくは教員であることを隠していました。

そんな私が変わったのは、最初に赴任した養護学校での体験です。こんな子たちがいたのか、と自分の視野の狭さに気づき、生きていること自体、素晴らしいことだと感じた私は、子どもたちと話すことで素直になれました。

その気持ちに拍車をかけたのが次の赴任先です。荒れた学校でしたが、地域の困窮など、荒れの原因も知るな

子どもたちの評判がすべて
嫌だと言っているならそれは失敗

力のある者が自分たちの都合を 押しつける理不尽さに怒りをもて

か、力で抑え込むのではなく、応援する姿勢を貫きました。腹が立ったのは

学校が落ち着いてからです。力関係が逆転した途端、生徒を従わせようとする威圧的な先生が現れたんです。職員室で異議を唱えましたが、若かった私は取り合ってもらえませんでした。

それまでも学級や学年、分掌でできることはあつたし、実際にしてきました。けれど校長にならない限り、学校全体は変えられません。次の異動先で目を掛けてくれた校長の強い勧め



新採で入って3年目。多くのことを学びました。授業中、寝ている生徒がいても、それは教師の責任だという学校文化の中で必死に工夫してきました。怒鳴って起こすのは簡単ですが、それではつまらない。寝ている生徒にも理由があるのです。そうやって入学時には落ち着きなかったのに、3学期、そして学年が上がるにつれて互いに思いやりをもった集団に成長していきます。ただ、今の状態がベストということではなく変わり続けなくてはいいけません。例えば、中には「校則や制服などルールがあるほうがラク」と思っている生徒もいて、そういう子にとっては「3年間楽しく過ごす」ことができていない可能性もあるわけです。どうすれば、一人ひとりが幸せになれるか、考え続けていきたいです。(松永 拓先生)

もあつて、管理職を目指すようになりました。

そうして桜丘中に来たのですが、当初は目の前のことに対応していただけ。転機は、大阪市立大空小学校の日常を描いた映画『みんなの学校』を観たことで訪れました。同校は、虐待、貧困、障がいを抱えた子を含め、全員が安心して学べる小学校ですが、映画の終盤、ある保護者が「でも、卒業したら行くところがない」と吐露したんです。それを見た瞬間、「ならば、大空小の中学校版をつくらう」と、ビジョンが明確になりました。「すべての子が3年間楽しく過ごせる学校」という方針を打ち出したのもその頃です。

——そうして小・中がつながったとして次の受け皿である高校への期待は？

偉そうなことは言いたくありませんが、一人ひとりに意識を向けてほしい。起立性調節障害で朝、起きられない生徒がいて、本校では登校時間を自由にするなどして対応しましたが、高校ではサボリと見なされ、退学を余儀なくされてしまいました。また、聴覚過敏の生徒に配慮して、本校では

チャイムを鳴らさないなどの工夫をしてきましたが、高校では訴えを聞いてもらえなかったそう。もしも「お前一人くらい我慢しろ」という発想があるんだとしたら、とても残念なことです。

うちの卒業生がすごいのは、厳しい規則は嫌だと思うと、同じような校風で、校則の緩い高校を自ら探していくこと。もしくは、「校則が厳しいことは知っているが、それよりも野球部で活躍することを優先する」などと、覚悟を決めて進学する生徒もいることです。たまに塾の影響を強く受けているような子はいるものの、私の時代のように「いい大学を出て、いい会社へ」という発想は総じてありません。

誰でも学校は変えられる 社会さえ変える力がある

——再任用を含め10年を同じ学校で過ごせたことも大きかったのでは？

その通りで、数年では、できることは限られていたでしょう。ただ、学校には校風というものがあり、それは校長が変わっても受け継がれていくわけです。大改革はできないかもしれないけれど、環境づくりをして、次に託すことはできるはずですよ。

一方で、学校は生徒がつくるものなのだと思います。子どもだって変えられる。実際、服装の自由化も定期

テストの廃止も、生徒総会における生徒の発案から始まったものなんです。

教師も同様、学校や社会を変える力をもっています。たまに、そうしたカリスマ的な先生が表に出てくるじゃないですか。カッコよく言えば、誰でも世界は変えられる。特に今は、ネットを通じて世界中の仲間とつながることができます。声を上げてほしいし、怒りをもつてほしいと思います。

——西郷先生は、「弱い立場にいる子どもを、大人の都合で押し込めるな」という怒りが原動力でした。ただ、怒りの対象を広げ過ぎると、「自分が怒ったところで」となりそうです。

いや、声に出さないとダメですよ。社会の変革なしに、自分の幸せはありません。確かに、個人でできることは限られますし、私がしてきたことも狭い枠内でのことでした。でも、思いは常に外を向いていました。そこにあったのは「権力の言いなりになるものか。力及ばず、変えられないこともあるけれど、自分も、あんなたちの思い通りにはならないぞ」という反骨精神です。子どもたちが誇りをもち、安心して住める国にするため、今、何をすべきか考えてほしい。力のある者が都合の良いことを押しつけてくる理不尽さに怒りの声を上げてほしい。偉そうになりましたが、心からそう思います。